様式Ｃ-7-2

自己評価報告書

平成 22 年 5 月 1 日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2007～2011
課題番号：19720092
研究課題名（和文）
韻律情報の有効性と視覚的文脈情報の関わりについての聞き手と話し手の立場からの検討
研究課題名（英文）　The effect of prosodic information and visually presented contextual information from the perspectives of speakers and listeners

研究代表者 広瀬友紀　(HIROSE YUKI)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：50322095

研究分野：心理言語学
科研費の分科・細目：言語学
キーワード：文理解　韻律情報

１．研究計画の概要

本研究では、視覚的文脈情報と文発話および文理解のそれぞれにおいて、視覚的文脈情報が韻律情報とその解釈にどのような影響を及ぼすかを検討することを目的としている。

２．研究の進捗状況

本年度は、非統語的諸情報を統制した言語材料を用いて、視覚的情報を操作したうえで、話し手を対象にした眼球運動測定実験および発話実験を行う予定であったが、研究代表者が産休を取得したため、実験の刺激文を作成するにとどまった。

３．現在までの達成度

④遅れている。
研究代表者の産後休業および育児休業により全体の計画は送れている。現在の段階では、アクセント有無を統制したうえで、左右枝分かれ構造の曖昧性を有するフレーズを作成し、それに対しそれぞれの（左あるいは右枝分かれ）解釈に対応するオブジェクトを含む絵刺激を作成した。Ｈ２２年に研究を再開し、刺激の自然さ評定等のノーミング調査を行った上で、眼球運動測定実験を行う予定であるが、そのための視覚刺激についても作成途中である。一方、昨年度より継続中であった形容詞付加位置に関する曖昧性を用いた読み時間実験については共同研究者を得て事象関連電位測定法を用いた実験としてデザインを再検討したうえでこれを遂行・完了した。この実験の当初の予測として、韻律的に複数のアクセント句からなる形容詞句では単一のアクセント句からなるそれに比べて、構造的に上位の名詞句に付加させる読み傾向を示すというものであったが、読み時間データ分析および事象関連電位のコンポネントパタン分析の結果、韻律的長さが形容詞句の付加位置に及ぼす影響は認められなかった。この実験結果に理論的考察を加えた論文を国内研究会で発表した。

４．今後の研究の推進方策

昨年度の継続として、作成途中であった実験刺激文の自然さ評定等のノーミング調査を行った上で、イントネーションと視覚刺激を統制した眼球運動測定実験を行う予定である。特に、話し手と聞き手の間で共有される情報のみならず、解釈上ミスマッチが生じるタイプの情報の実態を明らかにしたい。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

楠部 与誠 ・ 小林 由紀・ 広瀬 友紀、 日本語の形容詞句負荷における構成素の長さ効果－事象関連電位を用いた検証－、『電子情報通信学会技術研究報告[思考と言語]』、109(140), 33-38, 無, 2009

〔学会発表〕（計　０件）

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕